

第 72 回山形県自作視聴覚教材コンクール 全体講評【学校教育部門】

急速に AI 等のデジタル技術が発達する昨今、人間だからできることを改めて問いただす動きがある。そのような中、自作視聴覚教材には、人としての作者の想いが込められ、創造性をいかに発揮できる重要な意味がある。

今回の学校教育部門の 6 作品には、思いや創造性、地域性が内包されている。また、全ての作品が、何を何のために伝えるのかが明確であり、かつ、それらを伝えるための媒体を適切に用いており、教材として活用できる可能性を感じた。きっと制作した立場としても、大きな学びがあったのではないだろうか。

今後、考えていきたい点として、視聴者とやりとりをしながら学びの空間を創りたいのか、より広く様々な人々に行き渡らせたいのか、それとも、後世に残して未来の人々への記録にしたいのか、これらの目的に応じて、取材したものを取捨選択し、制作者の意図が対象者に適切に伝わるような工夫の必要を挙げたい。

これからの教材作成では、学習者中心の視点に立ち、視聴者が教材を視聴する中で、何を、どのように思考し、最終的にどう感情が動くかまで踏み込んで制作することが求められる。そのためにも、ICT の効果的な活用がポイントとなると思われる。将来、より発達していくデジタル技術を、制作者が効果的に活用することで、より質の高い学びを学習者に提供できるものと考えられる。